



## 1. 遅れて生まれてきたかった！

今日は行きつけの飲食店に行った。そこに先日、その店のご夫婦との共通の友人である男性が、生まれたばかりの子供を連れて来られたという話になった。

「お父さんによく似た子なんですよ」と店の奥さん。

「え、女の子であの人に似ていたら、、、。男の子だったらよかったのに」と俺は思わず言ってしまった。

俺としたことが！俺はジェンダーの研究をしていて、「女はこうあるべき」「男はこうあるべき」という考えが一番嫌いなのに。後から考えれば失言だった。

その男性はイケメンでカッコよくて、俺も憧れるような人なのだ。文句なく女性にモテるタイプである。武道もやっているの、顔はキリッとしていて、体も細マッチョで、男だったらいいけど、あれで女の子だったらと一瞬思ってしまったのだ。

しばらくたって考えると確かにこの頃は男顔の女優さんもたくさんいるし、オリンピックも女子が活躍しているし、俺は古いんだなあと思った。

そう、もう一度、時代と自分を調整しなくてはならなくなってきたのだった。俺はもうアラ還だ。俺が20歳の時に60代の人といたら、死ぬ間際のおじいさんというイメージだった。そういう歳に俺はなったんだ。いざ、なってみると、こんな幼いままで還暦なのかと思うのだけど。

最近になって今の若者を分析した本を何冊も読んでいる。これらの本に共通して書かれていることは、今の子は恋愛する子としない子と真っ二つに分かれるらしい。この頃はストーカーやセクハラという言葉が定着しているの、あまりしつこく一人の子にアプローチすると訴えられる可能性もある。従って、告白してダメな時はあっさり諦める。男女平等の世の中なので、ラブホテル代も割り勘。子供ができて困るのは昔は女性の方だっ

たけど、今は男の方みたいだ。女性は自分の意思で墮胎することもできるけれど、男は無理矢理おろせというわけにもいかない。できてしまったら、結婚したくないのに結婚せざるを得ないことにもなるのだ。

社会的にも今の子はそれほど出世したいという願望はないらしい。昔は「三高」男性がモテると言われていたけど、今は「三平（平均的な年収・平均的な外見・平均的な性格）」というのだそうだ。そういえば、俺たちの頃は「亭主元気で留守がいい」「24時間戦えますか」と男が仕事人間であることを奨励するようなCMがたくさんあったものだ。あれからもう40年近くたっている。

今の子はそういう感覚は理解できないはずなのだ。今の子は不況の時代を生きてきているため現実的。「さとり世代」とも言われる。価値観が多様化しているので、親にも反抗しないし、周りとの競争もしない。反抗したり、競走したりする対象がないのだ。また俺たちの頃は奥さんには仕事させない男の方が甲斐性があると思っているやつが多かったが、今は結婚したら、女性にも仕事してもらわないと困る、その代わりに、自分も家事を分担すると思っている男子が多いみたいだ。

女の子たちの方は、「一生、結婚したくない」と言っている子が多い。中には結婚したくはないけど、就職もしたくない、ただ、何もしないわけにいかないから就職はするつもりだけどという子もいる。女性の方も経済的な理由が大きいらしい。今は女性でも男並みに稼げるから、海外旅行だって行ける、贅沢だってできる。結婚したら、それを手放さなくてはならない可能性が出てくるのだ。

もはや、男尊女卑の時代はとっくに過ぎている。俺たちの頃は、女子はまだまだ文学部、女子大、短大という雰囲気、4年制大学に通っている女子は「女は4年制出たら就職はないから」と自虐気味に言っていた。あの頃は女の人生はクリスマスケーキと言われていて、25までに売れなかったら売れ残る。そういう時代だったのだ。しかし今では文系ほどの学部も半分くらい女の子がいる。

学生たちの話だと今は高校の時の生徒会長も女の子が選出されるケースが多いと聞いている。

いい時代になったなあをつくづく俺は思った。今だったら、俺だって学校に適応できていたかもしれないのだった。なぜ、俺は遅れて生まれて来なかったのか？

前回の脱毛処理を受けてから3ヶ月が過ぎた。多少は生えてきているが、ほとんど目立たない。これだったらプールに行っても誰も毛がはえていることに気が付かないだろう。俺が子供の頃悩んでいたのは、長島茂雄とか加山雄三とか胸毛が売り物のスターもいたけれど、その一方で毛深いのは女性から気色が悪いと言われることだった。日本は毛深い男性は少数派なので、毛深いと好奇の目で見られる。その一方でそれを気にすると「男らしくない」「男が毛深いのを悩むなんて、、、」と言われる。女性たちの要求は矛盾に満ちているのだ。ところが今では柳楽優弥や山田孝之など胸毛があるのに剃っている男優が増えている。その時の役柄に応じて、剃ったり剃らなかつたりするみたいだ。

でも今は男のための脱毛用品は薬局にも売っている。永久脱毛も手頃なお金でできる。俺も遅れて生まれてきていたら、若い頃悩まなくて済んだのだった。あー、遅れて生まれてきたかった。

ある有名女性作家のエッセイを中一の時に読んだのだが、彼女は若い頃に遊んでいない男性は女を知らないから、結婚した後悪い女に引っかかって、浮気する可能性が強い、私の夫は若い頃不良だったからたくさんの女を知っているから、今はいい旦那だと書いていたと記憶している。

今思えば、まあ、なんというご都合主義！ なんというお惚気！！ 女性から見れば、他の女にモテない、女と付き合えないような男は男気がなくてカッコ悪い、でも結婚した後浮気されるのは嫌だ、従って自分の都合のいいような理屈を作り出している。実際にはそんなことはないだろう。若い頃女遊びしていたような人が結婚したから180度人が変わるものだろうか？ しかし、俺が

この本を読んだときはまだ中学生だったから、なるほどなあ、俺はやはり男として不適格なんだなあと思ったものだった。

子供の頃の俺を悩ませたものは徐々に変わってきている。そして俺も歳をとるにつれて、少しずつ世の中のこともわかってきた。本を出している文化人だからといって、大した人格者とは限らない。人間なんてそれくらいのもなのだ。

小学校の頃の先生の体罰や暴言。これも今となっては『巨人の星』の星飛雄馬のお父さんも虐待親と非難されているくらいだ。俺は生まれた時期がまずかったのだ。先生の体罰や学校の管理教育の問題がマスコミでバッシングされるようになったのは俺が20代になってからだった。従って、俺が子供の頃はバッシングの前夜だったのである。従って、自分が理不尽な体罰や校則で悩んだことがない人は「それくらいのこと」と、平気で傷ついた子達を追い詰めるような発言をしていたものだった。

いじめの問題にしてもそうである。俺が大学の頃にいじめを苦にして中学生が自死した。あの当時、マスコミの中には自殺する男の子の方を非難する論調が目立っていた。いじめられたくらいのもので「弱い」という考え方である。今、そんな発言をしたらそれこそSNSが炎上するだろう。

例を挙げればキリがない。本当にあの当時はバカな大人が多かったのだ。ものごとを一括りにして考えてしまっている。あなたの感性と俺の感性は違っている。あなたからしてみれば些細なことであっても、俺にとっては重大なこと。そういうことは山のようにある。そういう基本的なことすら知らんから、規範に沿えない人を傷つけることを平気で口にしてきたのだ。

しかも、俺を傷つけた張本人の大人たちはそのことに対して罰は受けず、のうのうと今でも暮らしているはずだ。俺の中学の時の体育教師などは今だったら懲戒免職にされるようなことをしておきながら、その後地元の中学の校長になった。ハリウッドでは、このところケヴィンスペイシーや

ウディアレンが、大昔のセクハラ事件を暴かれて、仕事を干され、せつかくの彼らの名声に傷がついている。俺の先生たちは、あの人たちほどの有名人ではないにしても、何も罰せられないまま、それどころか自分のしたこと重大さにも気づかないまま人生を終えていく。俺としてはやりきれない。彼らが俺にしたことは人権侵害であり、セクハラであり、パワハラだからだ。そして、俺のトラウマは一生消えることはないのだった。

なぜ、俺はもっと遅れて生まれてこなかったのか???

過去は変えられない。だから前向きに未来を見なくてはならないのだけど、これからどういう人生が待っているのか。還暦まであと2年半しかない。60になれば映画もシニア料金になるし、65になれば年金ももらえる。だけど、細っていく人生の中で、俺は何をよすがに生きていくのか。一日一生。とりあえず、一日一生という気持ちで生きていくしかないのだ。

## 2. 人生、これからドラマはあるのか?

近所に占いをやってくれるサロンができた。行きつけの喫茶店の奥のところの小さな1畳くらいの部屋で30代くらいの女性がなきている。1回だけやってみようとタロット占いを受けた。2000円くらいだからほんのお遊び気分だった。

「これから、どこかに移られるというご予定ないですか?」と聞かれた。

「いや、それはないと思います。京都で一生暮らすと思います」と俺は答えた。

彼女によると仕事で他の街に行くという暗示が出ているというのだ。

行くとしたら東京かなあと俺は思った。俺は子供の頃東京に憧れていた。なんといっても東京は日本の首都だ。日本人の10人に1人は東京圏で暮らしている。俺はメジャー志向なので人が多く集まる場所に憧れるところがあった。

結局、運命の悪戯で京都に来た俺は京都で暮ら

すことをアイデンティティにするという物語を紡いでしまった。そして、非常勤講師として、俺はこれまで自分の好きな仕事だけ引き受けて、京都を拠点として30年近く頑張ってきた。他の街に行きたくないという気持ちがあったから公募にもほとんど出さなかった。その間、俺は自分のこだわりにも固執しながらも非常勤であることに負い目を抱いていた。しかし、もう50代も後半。今更、専任の職もないだろうし、あと10年ぐらい頑張ればこの生活を全うできる。俺の人生のこだわりはどうか成就しそうな気配なのだ。

あえて、こだわるとすれば、定年後にどこかの大学で博士号を取りたい。東京に行くというのは、ひょっとして博士号は東京の大学でとったほうがいいのかという意味なのだろうか。そう考えるとなんとなく胸が弾む。週に1回くらい東京に行くのは楽しいだろう。ただ、お金がかかるなあ。ただ今はコロナのおかげで、大学院だったらZoomで授業に参加すれば大丈夫なのかもしれない。1ヶ月に1回くらいだったら東京通学もなんとかなるだろう。しかし、それも「できれば」の話だ。達成できないならできないで構わない。歳をとるにつれて執着心が薄れてきている。現実が見えてしまっているのだ。

俺の母は60過ぎてから人生が思わぬ方向に開けた人だ。それまでは人の世話ばかりで生きてきた人なのだが、60過ぎて参加した、健康食品のビジネスがうまく行って、その報奨としてアメリカ、ヨーロッパ、中国、韓国、オーストラリアなど至る所を回った。俺の人生にもひょっとしてそういう展開が待っているのだろうか。

何か新たなことが起きても何も起きなくても、どっちでも構わない。とりあえず、自分の心を落ち着けて、生きていきたい。幸せだと思って生きていきたいのだった。

今は人生100年時代。そう考えれば、この先40年もの人生。死ぬのは怖い。しかし未来永劫にわたって生きていたいとも思わない。今したいことはといえば、子供の頃に帰って遊びたい。確かに

普通の50代の男性に比べれば、若い子と接する機会は多い。考えてみれば、俺は今の若い男の子の方が同一化できるのだ。しかし、何か足りないのだ。おそらく俺はそういう年齢の時にそういうことをしていない。歳をとるにつれて、さまざまなうんちくが積み重なっていっていく。しかし、俺のうんちくは普通の人とは順序が逆なのだった。

### 3. 女性恐怖症は治るのか？

何度も同じことを言うが、俺はほとんど女性と付き合うこともなく生きてきた。原因ははっきりしている。俺は子供の頃に凄まじいばかりの虐待を複数の女性たちから受けてきている。俺が女性から受けた傷のことについて語ると、大抵の女性は「それは一部の女性ですよ」と反発する。しかし、俺を傷つけてきたのは1人や2人の女性ではなく、複数なのである。女の子が子供の頃に男性から虐待を受けて一生男性恐怖症になったとしたら、世間の人は同情するだろう。しかし、男は同情すらしてもらえないのだ。これは最大の男性差別なのだ。

さらに、大学が英文科だったことも大きな追い討ちをかけた。このことが俺の人生を大きく狂わせてしまったのだ。女性恐怖が大きな引き金となって高校に行かなかった俺にとっては、これ以上もないほどの過酷な運命だった。自分で選んできて、繰り返すな！と言われるかも知れないが、あの当時若かった俺は先のことを深く考えていなかったのだ。当時2クラスしか英文科がなかった。もう一つのクラスは男女半々だったのだが、俺が入ったクラスは女子が7割以上を占めていた。しかし、当時前向きだった俺は、これが女性恐怖症を治す、きっかけになることを期待していた。

ところが、結果は逆だった。

俺はあの頃、異常な女性恐怖症だった。女性の体を汚らわしいと感じていたのだ。しかし、表面は誰にでも目一杯優しく接していたつもりだった。そのせいか、変に俺のことを好きになってく

れる子もいた。しかし、その一方で俺のことを毛嫌いする子が出始めた。俺は自分のどこがどう女子から気持ち悪がられるのかがわからず、女性に対して敵愾心を抱くようになっていった。

また俺はジェンダーに反発していたため、男性の枠に捉えられることに抵抗を感じていた。当時はまだ80年代だったので、男が仕事をして、女が家事をするのが当たり前の世の中だった。女の子たちの方も頼ったり、甘えたりすれば男は喜ぶと思っていた。だけど、俺は嫌だった。それに俺はまだ男の一員になれたような気分ではなかったのだ。俺はずっとはみ出しもののボッチ君だった。男であることの重圧に苦しんでいた。さらに不登校で学校に行かれなかった。俺はブランクが大き過ぎたのだ。

今でも女性と付き合おうとすると、「きもい」と言われるのではないか、「男らしさ」を強要されるのではないか、そういう恐怖心が湧いてくる。俺のことを詳しく知らん間はいいいけど、親密になったら、また人格を否定されるようなことを言われるのではないか。俺の中ではいつしか女性一枚岩になってしまっている。

振り返ってみると大学時代までの20年余りは、俺に宿題が与えられた時期だった。卒業してからは徐々に宿題を片付けていった時期だった。

20代は一人の殻に引きこもった。30代になり、この気持ちをどうにかしようと、その後、フェミニズムに頼った。そして男性運動との出会い。そこで出会った男性たちは、男性問題に関心があるとは言っても、俺とは真逆の囚われの男性たちである。男であり過ぎるが故に女性や弱者を傷つけることをしてしまう。そういう男たちだった。

俺は、むしろ弱者男性で、誰かを下に見ることができない。俺は男女を問わず、人のことを「お前」といったことがない。「お前」と人のことを呼ぶやつは、相手を自分よりも下位に見ているか、同等と見ているかどちらかである。俺は常に周りの連中よりも自分の方が下位だと思っていた。男性であっても、女性であっても。

しかし、男性運動で出会った男性たちは下から相手と接するしかない男の気持ちがわからないのだ。せっかくジェンダーの団体に入ったのに、そこでも誰も理解してくれないとなればますます俺は異常だという疎外感は強まる。

このことは前回の連載でも書いた。別に前回と同じことを書こうと思って書いたわけではなく、自分の心にあるものをありのままに書いていたら前回と同じ内容になってしまった。まさに反芻である。俺はこの問題にいつまでも囚われている。反芻しても答えは出ないのに、俺は必死で過去を消化しようとしているのだった。本当に遠回り、遠回りの人生。なぜ、神様は俺にこれだけ難題を与えるのか。

女性恐怖症のサイトを読んでいると、イメージトレーニングという言葉が出てくる。俺は女の人に対して悪いイメージばかりを膨らませてきているのだ。それに自分に対するネガティブな思いも依然として消えていない。俺は長い間、女性を憎み、そして、女性からトラウマを負わされたことをいつまでも克服できない自分を嫌っている。負のイメージトレーニングを俺は数十年にもわたって繰り返してきているのだ。

女性恐怖症について書いた文献は極めて少ない。女性恐怖症という言葉自体はあるのだけど、まだ研究している人がいないのだろう。しかし、その数少ないサイトを見ていると俺と当てはまる項目がたくさんある。やはり、原因は子供の頃のトラウマである。実際には彼を傷つけたのは一部の女性なのだけど、俺はそれを全ての女性に広げて考えてしまっている。

今から27年前、1994年、30歳の時、神経科のクリニックに通い始めた。その当時からカウンセリングを廉価でやってくれる診療所は出始めていた。その時のカウンセラーの先生はまだ20代の若い男性だったが、ある時、こう言われた。

「國友さんと話していると自分の人生をストーリー仕立てにしていると思う時があるんです。これから違ったストーリーに書き換えることはでき

ないですか」

なるほど。俺は因果応報にこだわるので、自分の物語を紡いでいるというところがあるのかも知れなかった。

『フリーガイ』という映画を観た。何も予備知識なく見たら、コンピューターのゲームの世界の話だ。ゲームの中の AI がどう変わっていくかという話である。コンピューターの中ではプログラミングを変えることができる。それと人間を準えた話だ。俺ももうそろそろ過去の繰り返し言はやめて、自分のこれまでのプログラミングを書き換えなくては！

もう 57 歳。30 代くらいまでは 10 代の頃のトラウマが生々しく残っていたため、カウンセラーの人から言われてもストーリーを変えることは難しかったが、流石に今は過去のことになってきた。今だったらストーリーを書き換えることはできるかもしれないのだ。

そうなのだ。過去のことを切り離せば、新たな物語を紡げることになるだろう。どう紡いだところで誰も文句は言わない。

さあ、自分というパソコンを再起動！不要な記憶はクリーンアップ！！それがこれからの目標。この連載でも次回からはできる限り過去のことは書かないと誓約したいと思う。

#### 4. 『キネマの神様』（山田洋次監督・2021）

山田洋次の映画である。山田洋次といえば、俺なんかは、「あの歳でよくやっている」という思いが湧いてくる。89 歳である。渥美清、高倉健、三國連太郎・・・彼の映画で主人公を演じてきた俳優さんは、ほとんど死んでいる。山田監督の奥さんもだいぶ前になくなっているはずだ。

皆周りの人があの世に行ってしまった年齢になって、それでも映画を作り続けるというのは大変なものだ。しかも今回は、最初は志村けんが主役を演じる予定だったのが、コロナで突然帰らぬ人となってしまい、急遽、沢田研二を代役に立てて

の映画である。

山田監督の映画を見るたびに思うのは、昭和レトロだなあー、感覚が時代錯誤だなあという部分だった。語り口や演出は名人芸なので、話に入りこまされるものの、そういう気持ちが残るのだ。まあ、最初から昭和レトロと割り切ってみればいいと今回も割り切ることにしたのだった。

映画そのものは流石よくできている。やはり名匠だなあと思わせる。感心させられるのは小道具や美術が細かいところまで神経が行き渡っているところだった。

この映画の主人公は 78 歳だが、どうしようもないダメ男である。酒やギャンブルにお金を使いまくっていて、妻と娘はその尻拭いをさせられている。しかし、彼女たちは文句を言いながらも主人公のことを大切に思っている。まさに寅さんと桜さんの関係である。

しかし、俺はこの時点で、フェミニストは怒るのではないかと心配になってしまう。

この映画はまさに家父長的な世界を描いていて、女性たちは彼に振り回されても、彼を見捨てようとはしない。まさに甘えん坊で身勝手に、女の人たちは怒るべき男なんだけど、それを許してしまう映画なのである。

とは言うものの、観客は女性も相当多い。そういえば、俺の知り合いの先生の奥さんも寅さんファンだとおっしゃっていた。

考えてみると山田洋次さんはフェミニズムよりも前の世代の人である。女の人でもこの世代の人は、ジェンダーのことなんかは全然わかっていないから仕方がないといえば仕方がない。

今から 40 年前、雑誌で、アイドルタレントの理想の恋人像の記事を読んでいると、「男を立てる古風な女性」と応えている男性アイドルが多かった。そのことに関しては、フェミニストたちの中にも怒っている人は多かったが、俺は少なくともそういう男ではなかった。さだまさしの『関白宣言』なんて歌も流行ったけど、さだまさしのファンと言ったら、大抵は女性である。俺だったら、あん

なお恥ずかしい歌、絶対に歌えない。

そして、女性よりも弱者で、しかも全く女性を下位に見た覚えもない俺は今でも女性恐怖症で苦しんでいる。

人間って、難しい、世の中は単純なものじゃないのだ。この辺りのことをいつまでも深く考えていても意味がない。とりあえず、忘れる。新しいソフトウェアを自分の中にインストールである！